

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1/4)

研究題目	コロナ禍における伝統芸能の「グッド・プラクティス」に関する研究	報告書作成者	前原恵美
研究従事者	前原恵美		
研究目的	<p>新型コロナウイルス禍(以下、「コロナ禍」)の影響を受け続けている伝統芸能は、繰り返される緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置の発令と解除を経て、今なおコロナ禍の渦中にあると言える。とはいえ、コロナ禍の影響が現われはじめて2年が過ぎようとしており、この閉塞感から脱却するためにも、「グッド・プラクティス」(以下、「GP」)すなわち「優れた取り組み」をキーワードに、with コロナ時代の伝統芸能の継承について、将来を見据えることが必要なフェーズに差し掛かっている。</p> <p>本研究は、コロナ禍にあって伝統芸能の継承・普及に取り組むGPの事例を収集し、実演家、企画・製作者、文化財保存技術者という、それぞれのレベルで伝統芸能と関わっている人々を対象に、複数ジャンル(主に能楽、歌舞伎、尺八楽)にわたる聞き取り調査を行い、成果を公表する場としてフォーラムを企画・開催し、事例報告と分析、将来に向けた提言を行い、コロナ禍における伝統芸能の再起に資することを目的とする。</p>		

研究内容	<p>1. 情報収集・現状調査・分析</p> <p><u>1-1.「GP」の定義</u> ユネスコで定義されている「GP」とその運用について、東京文化財研究所(以下、当研究所)の石村智 音声・映像記録研究室長の協力を得て情報収集を行った。</p> <p><u>1-2.「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」の分析</u> 当研究所で、前原が2020年4月より主導している「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」調査データの分析を行った。</p> <p><u>1-3.「新型コロナウイルス禍における伝統芸能支援の現状」</u> 公的な財政支援策およびクラウドファンディングについて、当研究所の鎌田紗弓研究員の協力を得て事例収集・分析を行った。</p> <p><u>1-4.「伝統芸能を繋ぐ取り組み」の事例研究</u> 2021年、新たに国の選定保存技術に選定された「箏製作」「三味線棹・胴製作」および、その保存団体に認定された「邦楽器製作技術保存会」について、聞き取り調査を被内、その背景と現状について分析を行った。 また、若手から中堅の実演家によるコロナ禍の特徴ある取り組みとして、〈蒼天〉(日本舞踊と邦楽のグループ)および〈The Shakuhachi5〉の取り組みについて聞き取り調査を行った。</p> <p><u>1-5.劇場運営・企画制作に関する事例調査</u> 国立劇場等を運営する独立行政法人 日本芸術文化振興会理事・大和田文雄氏にコロナ禍における伝統芸能公演にかかる劇場運営・企画制作に関する聞き取り調査を行った。また、公立文化施設の事例として、オペラやクラシック音楽の演奏会とともに伝統芸能のプログラムも企画してきた、兵庫県立芸術文化センター事業部チーフプロデューサー・古屋靖人氏ほかにも同様の調査を行った。</p> <p><u>1-6.実演家に関する事例調査</u> 能楽師・片山九郎衛門氏に、関西能楽界のコロナ禍での対応や工夫について聞き取り調査を行った。また、流派を超えた尺八演奏家の団体「日本尺八演奏家ネットワーク」(JSPN)事務局の田辺冽山氏に結成の経緯やコロナ禍での活動について聞き取り調査を行った。</p> <p><u>1-7.文化財保存技術に関する調査</u> 歌舞伎小道具の製作・レンタルを行っている藤浪小道具株式会社代表取締役社長・野村哲朗氏(「歌舞伎小道具製作技術保存会」として、国の選定保存技術「歌舞伎小道具製作」の保存団体に認定、同保存会会長は野村氏)に、歌舞伎小道具のコロナ禍の影響や対応について聞き取り調査を行った。</p> <p><u>1-8.文化庁「邦楽普及拡大推進事業」について</u> この事業は、コロナ禍での邦楽普及を、高校の部活、大学のサークルを通して行う事業で、邦楽器をあらたに製作してもらい、国が買い</p>
------	--

研究内容	<p>上げた上で高校や大学に無償貸与するとともに、修理や発表会、配信の支援を行う包括的な邦楽普及事業として注目される。事務局である凸版印刷株式会社(担当 江副淳一郎氏)や、採択された大学サークル(上智大学箏曲部および弘前大学津軽三味線サークル)への聞き取り調査と視察を行い、この事業への期待と現状、課題について分析した。</p> <p>2.フォーラムの企画・開催</p> <p>上記調査・研究内容を公表すべく、以下のフォーラムを開催した。</p> <p>日時:2021年12月3日(金) 10:30~16:45 場所:東京文化財研究所 セミナー室</p> <p>※当日の内容については、添付した報告書の「当日スケジュール」(ii)を参照されたい。</p> <p>3.成果の一般公開(配信と報告書刊行)</p> <p>上記フォーラムは、コロナ禍により人数を制限して開催せざるを得なかったため、フォーラムの様子を記録撮影し、編集の上、当研究所のホームページ上で配信した(https://www.tobunken.go.jp/ich/vscovid19/forum-3、2021年12月28日より2022年5月末まで期間限定公開)。</p> <p>また、フォーラムの内容に追補した報告書を刊行した(【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム3『「伝統芸能と新型コロナウイルス—Good Practice とは何か—」報告書』、2022年3月、東京文化財研究所、全124頁)。なお、5月末を目途に、報告書のPDFデータを当研究所ホームページ上で公開予定である。</p>
------	--

<p>研究のポイント</p>	<p>現在では、まだコロナ禍を完全に脱したとは言い難い状況だが、このような状況下であっても、実際に伝統芸能に関わる実演家、企画・製作者、保存技術者の声を集めて情報や課題を共有し、未来志向の場を作ることは重要である。また、研究者はそうしたネットワークを有する立場にある。本研究ではキーワードとして、まだ日本ではあまり浸透していない「GP」の概念を取り入れた点に特徴がある。また、コロナ禍の影響を、様々な方向から伝統芸能に関わる立場から、しかもジャンルを横断した視座で研究する点も特徴といえる。</p>
<p>研究結果</p>	<p>1.現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の影響下での伝統芸能公演数の推移は、2021 年半ばくらいまで国による緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置の発令・解除にかなり忠実に呼応していた。しかしその後は双方の相関性が見えにくくなっている。また、飛び抜けて公演数の多い東京は、中止・延期件数および再開・開催件数も突出しており、伝統芸能全体への影響力が大きい。 <p>2. 支援と自助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公的支援メニューは次々に打ち出されたが、応募要件が現状に合わない等の理由から、支援を求める人に必要な支援が届きにくい現状もあった。その隙間を埋める形で、クラウド・ファンディングが大いに利用された(日本に特徴的な現象)。 ・若手から中堅の実演家は、公演の機会が激減したため、クラウド・ファンディングを利用するなどして、自主的に記録した公演の映像配信を行い、表現の場を途絶えさせないよう努めている。各支援メニューにおいて配信とコロナ対策がかなり重視されたため、若手から中堅実演家が配信という発表の場を開拓するきっかけになっている。一方で、コロナが収まるにつれて配信が減ってきているのも現状で、今後、リアルな公演の復調の中で、映像配信がどれだけ定着していくのか、現時点では判断できない。 <p>3. 影響が見えにくいところへ関心と支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・比較的數字で見えやすい実演家への影響(公演数によりあるていど推定可能)に比べ、企画・製作者や保存技術者(小道具や衣裳、楽器製作者など)への影響は深刻であるにも関わらず見えにくい。そうした中で、箏製作や三味線の棹・胴製作技術が国の選定保存技術に選定され、後継者育成の補助が始まったことは注目される。また、文化庁「邦楽普及拡大推進事業」において、高校の部活や大学のサークル活動など、今後、邦楽を広い意味で支えていく層に対して、国が楽器を買い上げて(楽器製作者の需要を確保)無償貸与する(若者への邦楽の敷居を低くする)ことは、経済的にも芸能継承にも潤滑油となる可能性があり、楽器製作者、学生からも期待されていた。
<p>今後の課題</p>	<p>コロナ禍の影響をいまだ受け続ける中で、現在起きている問題や新たな試みを客観視することは、厳密には難しい側面がある。一方で、2年以上におよぶコロナ禍にあって、状況は刻々と変わり続けており、その時々課題や現状や取り組みを俯瞰しようとし続けることも重要であろう。引き続き、コロナの渦中でしか得られない情報や声を収集し、研究者の視点で整理・分析していくことが必要である。</p>